

使役形態素「させる」と内的制御性についての一考察

——分散形態論でどこまで説明できるのか

外崎淑子

1. はじめに

日本語の統語的使役文は、「太郎が花子を走らせる」のように、元の能動文（「花子が走る」）から使役者の項（「太郎」）が増えるのが一般的である。しかしながら、日本語には「彼がペットを病気にする」→「彼がペットを病気にさせる」のように、項が増えない「させる」文が多数存在する。本稿では、このような「する」と「させる」の交替、あるいは他動詞と他動詞＋(s)aseの交替について、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT」を用いて実際の使用について概観した上で、日本語母語話者がどのように項の増えない「させる」文（「使役余剰」定延2000）を認識しているか考察し、分散形態論の枠組みでどこまで説明できるのかを論じる。本稿では、分散形態論（Halle and Marantz 1993他）での田川（2016）のCAUSを用いた分析と、三宅（2017）が影山（1993）を再考し有用性を論じた「制御性（意図性）」を応用して用いることで、分散形態論の枠組みでの使役余剰の説明を試みる。

2. 先行研究

2.1 「させ」の意味特徴と統語との関係

黒田（1990）は、自立語としての「させる」の可能性を論じたが、定延（1991）はその論考の不備を突き、認知的な観点から、「させ」は事態の成立に対しての使役者の働きかけが「間接的」であること表す形態素であると論じている。森（2004）はインターネットのコーパスより、「形容詞ク {する／させる}」の生起について、(1)(2)のような例を挙げ、傾向として(3)の2点を挙げている。

- (1) 何気ない一言が太郎を悲しくする／させる。 (森2004, p. 33)
- (2) その方法が料理をおいしくする／させる。 (森2004, p. 37)
- (3) I：感情形容詞の連用形に後接するスル-サセル置換では「サセル」が、属性形容詞の

連用形に後接するスル-サセル置換では「スル」が優先される傾向にある。

Ⅱ：感情形容詞・属性形容詞の種別を問わず，形容詞の連用形に後接するスル-サセル置換では，X項（ガ格）が非情物であるのが典型となる。（森2004, p. 37）

外崎（2018）は，「形容詞ク {する／させる}」，「漢語動詞 {する／させる}」の交替の現象を作例も含め検討し，森（2004）が観察した，経験者と標的の2項を持つ感情形容詞は「形容詞クさせる」が基本であること，対象の項1つを持つ属性形容詞は「形容詞クする」が基本であることを確認した上で，さらに，自律的な事態の達成を含意する場合は属性形容詞であっても(4)のように「形容詞クさせる」も許容できること，「漢語動詞 {する／させる}」交替は，(5)のように，広義の属性変化を表すものだけに限り，その交替には自律的な事態の達成の含意が関わることを論じた。以下の(4)(5)において，「する」と「させる」では当然ニュアンスは異なるが，どちらも文法的である。また，分散形態論の枠組みで，その意味の違いをV (Cause)の素性の違いに還元し，V (Cause)の素性として[±自律的な事態の達成]¹⁾を立て，[−自律的な事態の達成]の場合は「する」が，[+自律的な事態の達成]の場合は「させる」が音韻挿入されることを提案した。

(4) 新しい治療方法がガン細胞を小さく {した／させた}。 (外崎 2018, p. 53)

(5) 彼は若い頃の思い出を {美化して／美化させて} 忘れようとしている。(外崎2018, p. 55)

(6) V (CAUS) の構造と形態の対応²⁾

a. [VP [AP [√小] A] V (CAUS) −自律的な事態の達成]

tiisa ku s

b. [VP [AP [√小] A] V (CAUS) +自律的な事態の達成] (外崎2018に基づく)

tiisa ku sase

定延（2000）は認知言語学の枠組みとして自ら提唱した「カビ生えモデル」にて，これら項の増えない使役（「使役余剰」）を説明している。定延（2000）は，「マネージャーは，しぶるタレントを結局あの番組にだした／でさせた」と言う意図の(7)の使役余剰文を次のように説明する。

(7) マネージャーは，しぶるタレントを結局あの番組にださせた (定延2000, p. 121)

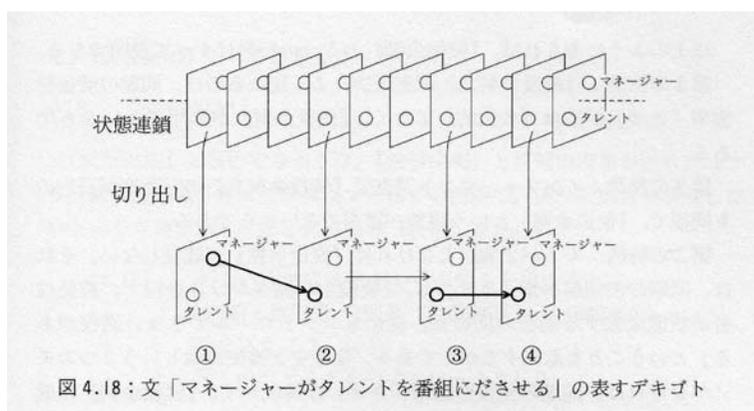
定延（2000）は，この文を，認知言語学で通常用いられるピリヤードモデル（Langacker 1991）式のデキゴトだと考えれば説明不可能であるが，力に特化しない，切り出し基準で切り出された「カビ生えモデル」のデキゴトとして捉えると説明可能であるとする。カビ生えモデルとは，「部屋のすみにカビが生える」というデキゴトを，力のやりとりとは無縁の自然な変化として捉えるモデルで，「部屋のすみに何も無い状態」から「部屋のすみにカビがある状態」に変化したものと捉えるモデルである。カビ生えモデルに従って，(7)の文のデキゴトの

「タレントの番組出演に至る一連の状態連鎖」から重要な状態を切り出すと、以下の①～④となる。

- ① マネージャーが力を持っている状態
- ② タレントが（マネージャーから力を受けて）力を持っているが決心がつかない状態。
- ③ タレントが（マネージャーから力を受けて）力を持っていて決心がついた状態。
- ④ タレントが（その力を発散して）番組に出ている状態 （定延2000, p. 132）

それを図式化すると以下のようになる。

(8) 定延 (2000) p. 133より



②-③は、何者にもコントロールできない不安定な過程であり、この過程が「させ」で表されると定延 (2000) は説明している。

カビ生え理論で、確かに、上記の使役余剰は説明できるが、「何者にもコントロールできない不安定な過程」をデキゴトが含むにも拘わらず、「させ」の生起しない他動詞文もある。また、逆に、「コントロールできない不安定な過程」がないにも拘わらず「させ」が生起する例もあるように思われる。2.2では、カビ生え理論では説明し得ない例について考察する。

2.2 「させる」の生起制限再考

2.1の後半では、定延 (2000) の論考を考察したが、以下の作例について考えたい。

- (9) 太郎は狭く不安定な台の上に、全ての荷物を載せようとした。載せては崩れ、崩れては載せてをくり返した。どうにかバランスを取りつつ作業して、やっと
 - a. 全部の荷物が台上に載った。[自動詞]
 - b. 全部の荷物をうまく台上に載せた。[他動詞]
 - c. *全部の荷物をうまく台上に載せさせた。[他動詞サセル：使役余剰文]
 - d. *全部の荷物をうまく台上に載らせた。[自動詞サセル]

- (10) グラウンドに長い棒を立てようと、生徒達は皆で力を合わせ、バランスを取った。5, 6回繰り返したあと、ようやく
- a. 棒が地面に立ったが、いまにも倒れそうである。[自動詞]
 - b. 棒を地面に立てたが、いまにも倒れそうである。[他動詞]
 - c. *棒を地面に立てさせたが、いまにも倒れそうである。[他動詞サセル：使役余剰文]
 - d. 棒を地面に立たせたが、いまにも倒れそうである。[自動詞サセル]

(9ab) (10abd) は当然ニュアンスは異なるが、全て許容文である。(9ab) は、「荷物が載る」「荷物を載せる」デキゴトは、太郎が外からの力でのみコントロールできるものではなく、荷物のバランスが重要であり、きちんと載るまでには、いくら太郎が頑張っても、コントロールしきれない不安定な過程が含まれていたはずである。また、(10ab) の「棒が立つ」「棒を立てる」も生徒達がコントロールしようにもコントロールしきれない部分があり、棒のバランスが取れてまっすぐ立つまでには、不安定な状態があったはずであるが、(9c) (10c) のように「他動詞サセル」は非文である。現実世界のできごとをどう認識するかと言語の切り取り方は異なる。言語的に非情物主語の「載る」「立つ」は、動作主による意志的動作の結果の状態、「(太郎が荷物を荷台に載せたので) 荷物が荷台に載った」「(生徒達が棒を地面に立てたので) 棒が地面に立った」である³⁾。ただし、「立つ」について考えれば、森田 (1988) が「コロンプスが卵を立たせた」の例を出し、元々立つはずのない卵を工夫によって立った状態へと変えたため「立たせる」でよい (森田1988, p. 52) と論じ、「その物の性質や現状・場面などから、そうはなりにくい、あるいは、そうなることを予想もしていない状態へと意志の力で導く意識 (p. 53)」が表されれば「自動詞サセル」が可能としている。であるならば、なおさら、余剰使役の「他動詞サセル」も許容されてよさそうであるが、本稿にあるように、「他動詞サセル」は許容文にならない。

また、他動詞「出す」の使役である「ださせる」が使役余剰で用いられたのと同様、作例ではあるが、他動詞「入れる」の使役の「入れさせる」も使役余剰で用いても、許容文として違和感はない。

- (11) 太郎が我々の音楽サークルに入りたいと言ってきたので、
- a. 太郎をサークルにいれた。[他動詞]
 - b. 太郎をサークルにいれさせた。[他動詞サセル：使役余剰文]
 - c. 太郎をサークルにはいらせた。[自動詞サセル]

使役余剰文の (11b) は、「我々のサークルが太郎の入会を即決した」解釈でも可能な文である。むしろ「太郎がサークルに入るか否か不安定な状態」があるようには解釈できない。

また、定延 (2000) が説明した使役余剰の「ださせる」も、ワンクッション置かない解釈で十分に用いることができる。以下、作例である。

- (12) もうすぐ試合だが、太郎の怪我の具合があまり良くない。
- 太郎が試合に出るのは、無理そうだ。[自動詞]
 - 太郎を試合に出すのは、無理そうだ。[他動詞]
 - 太郎を試合にださせるのは、無理そうだ。[他動詞サセル：使役余剰文]
 - 太郎を試合にでさせるのは、無理そうだ。[自動詞サセル]

これらの例文をどのように捉えればよいか。外崎（2018）は、項の増えない「させ」が生起する意味的条件として、広義の属性変化を表すことと、自律的な事態の達成を含意することを挙げ、分散形態論での分析の可能性を探ったが、次の節では、まずは、使役余剰について、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT」を用いて実際の使用について調査した上で、日本語母語話者がどのように使役余剰を認識しているか考察する。その上で、分散形態論の枠組みでどこまで説明できるのかを論じる。

3. 使役余剰：実例

外崎（2018）では、「形容詞ク {する／させる}」及び「漢語動名詞 {する／させる}」について考察したが、本稿では、和語の有対他動詞と外来語動名詞の他動詞タイプが「させる」と置換しうるかを調べるために、早津（1995）の「有対他動詞」「無対他動詞」（p. 181, 182）と、田川（2016）の「外来語動名詞：他動詞タイプ」（p. 9, 10）の語彙を「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT（以下、「均衡コーパス」）」にて検索した。

以下、実例を挙げるまえに、「させる /-(s)ase/」と「さす /-(s)as/」について簡単に論じる。統語的使役では、「太郎は花子に論文を {書かせる／書かす}」のように /-(s)as/ は、 /-(s)ase/ と同等の意味機能を持つものとして用いられる。ただし、Kuroda（1993）が指摘しているように、 /-(s)ase/ はどの活用でも問題がないが、 /-(s)as/ は、「書かした」「書かしたろう」「書かしたり」など、連用形においてはやや不自然である。また、Kuroda（1993）は、 /-(s)as/ は、 /-(s)ase/ とは異なり、主語尊敬語化ができないとしている⁴⁾。

- 先生が直美にビールをお飲ませになる。
- *先生が直美にビールをお飲ましになる。 (Kuroda 1993, p.10, 11)

/-(s)as/ は、語彙的使役（他動詞）の接尾辞としても用いられる。「生きる／生かす」「満ちる／満たす」「伸びる／伸ばす」「燃える／燃やす」「肥える／肥やす」（Kuroda 1993）などである。 /-(s)as/ が統語的使役か、語彙的使役かといった見分けの困難さはあるが、ここでは、 V-(s)as で項を2つ取る /-(s)as/ は他動詞（すなわち語彙的使役）の接辞と考え、 /-(s)ase/ のみ「使役余剰」の可能性ありとして扱うこととする。そして、以下の表では、 /-(s)as/ の他に他動詞がない場合、 /-(s)as/ = 他動詞として、表を完成させた。

表1では、/-(s)ase/ 文の欄と「させ」文の欄に入れたものが、均衡コーパスからの使役余剰文の例文である。自動詞文の欄が空欄になっているものは、自動詞の例文がコーパス上にも存在しなかったものである。

表1 「する/させる」置換（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」より）

	自他形態	自動詞文	他動詞文	/-(s)as/	/-(s)ase/文(均衡コーパスより) 使役余剰文
①	kir-e kir-as	息が切れる	林田はこちらにむかって手を振ると、息を切らして走り寄ってきた。		kir-(s)ase 僕は息を切らせながら、そこに立ち止まって目をこらした。
②	togir-e togir-ase-	言葉が途切れる			togir-(s)ase 里見は、言葉を途切らせ、真っ暗な窓の外へ視線を投げた。
③	nur-e nur-as	座席が濡れる	座席を濡らす		nur-(s)ase 助手台のドアに手をかけたが、座席を濡らせてしまうことに気づき、「体が濡れているのですが…」と、言った。
④	hirog-ar hirog-e	病気の感染が広がる	病気の感染を広げる		hirog-e-sase (他+sase) 感染をほかの臓器や器官に広げさせないためにも、できるだけ早い治療が望まれます。
⑤	tubu-re tubu-s	肝が潰れる	肝を潰す		tubu-s-(s)ase (他+sase) たまには大きな花火を打ち上げ肝を潰させる、などをしてみてください。
⑥	sam-e sam-as	熱が冷める	(作)熱を冷ます		sam-as-(s)ase (他+sase) 一週間ぐらい熱を冷まさせたいと思って。
⑦	ot-ir ot-os	砂が落ちる	砂を落とす		ot-os-(s)ase (他+sase) 砂丘の上に、ヨシ、タケ、粗朶、板などで組み立てられた垣は、それによって風力を弱め、また障害物となって、そこに風の運んできた砂を落とさせ、堆積させる。
⑧	nuk-er nuk	塩が抜ける	塩を抜く		nuk-(s)ase(他+sase) 弟はしょっぱくて厳しいって言ってました。それを抜かせば(どうやってw)美味しいと思うんだけど。
⑨	tamot tamot	形が保つ	品質を保つ		tamot-(s)ase(自他+sase) 品質を保たせるために食品添加物の入った食品が必要になります。
	外来語動名詞	自動詞文	他動詞「する」文		「させ」文(均衡コーパスより) 使役余剰文
⑩	キープする		雰囲気キープする		後ろの先端はそろえず自然に流します。ラフな雰囲気キープさせましょう。
⑪	ストレッチする		厚みをストレッチする		パーツの厚み分をストレッチさせる必要があります。
⑫	ストックする		XがYをZにストックする。		有象無象を『作家』予備軍として、バブル以降の編集者の地図のうちにストックさせる。
⑬	プラスする		エンジンにトルクをプラスする。		もともと高回転に強い2Zエンジンに、下からグイグイくるトルクをプラスさせたって感じかな。

⑭	ブレンドする		甘みと苦みをブレンドする	玉葱の甘みとゴーヤの苦みとをブレンドさせた素麺チャンプル
⑮	ロックする	タイヤがロックする	タイヤをロックする	最終コーナーへのブレーキングでフロントタイヤをロックさせてしまった
⑯	リサイクルする		核燃料をリサイクルする	核燃料をリサイクルしていく、プルトニウムをリサイクルさせていくということの根本に触れてくる可能性があるわけです。
⑰	リリースする		高橋さんは、リリースする(逃がしてあげる)ことがわかっている魚には、とても優しい手つきで魚を持ってあげている。	アメフランも ナマコもリリースさせておもちゃ箱のふたをしめる。

まず、和語の①～⑨であるが、⑨の「保つ」は、早津(1995)の分類では無対他動詞であるが、均衡コーパスでは自動詞用法が複数検索される(「～が保つ(4例)」「～が保って(2例)」「～が保ちました(1例)」)。そのため、「保つ」は自他同形とした。これによって、「～を保たせる」は、自動詞文「保つ」の使役文と解釈できる。①～⑧は全て有対他動詞であり、無対他動詞に/(s)ase/形の対応がなかったことは興味深い結果である。

①～⑧には、自他の共通語根に(s)aseのついたもの(①～③)と、他動詞形態素(または自他共通形態素)に(s)aseがついたもの(④～⑧)がある。

①の「息が切れる」は、自他の共通語根にasの付いた「息を切らす」と(s)aseのついた「息を切らせる」の2パターンあるが、用例としては「切らす」のほうが多い。

(14)	息を切らす	息を切らせる
	「息を切らして」45例	「息を切らせて」20例
	「息を切らしながら」45例	「息を切らせ、」2例
	「息を切らすX」(息を切らすくせに) 3例	「息を切らすX」0例
	「息を切らしたN」3例	「息を切らせたN」3例
	「息を切らしたまま」0例	「息を切らせたまま」1例
	文末表現 0例	文末表現 0例

一方で、②の「途切れる」は、as形の「途切らす」は存在せず、「途切らせる」のみ用例がある。③の「濡れる」は、as形他動詞「濡らす」が78例、(s)ase形の「濡らせる」は1例、自動詞の使役「濡れさせる」は0例であった。①、②、③の/(s)ase/形は形態的に考えても、いずれも他動詞として用いられていると考えてよいのではないか。

さて、④～⑧は、いずれも、他動詞形態素(⑨は自他同形の自動詞に/(s)aseの付いた使役と考える)に(s)aseがついたものであるが、項が増えていない。これらが使役余剰である。

⑩～⑰はカタカナ語動名詞であるが、このうち、⑮の「ロックする」は田川(2016)が「他動詞タイプ」としているが、均衡コーパスでは実際には自動詞用法の用例が複数見られるた第9号(2019)

外崎淑子

め、自動詞形もあり、とした。

以上のデータの、項の増えない使役（使役余剰）である④～⑧、⑩～⑭、⑯⑰に共通する特徴を考える。

(15) 使役余剰が生起する要因

- 1) 和語の動詞は形態的に対応する自動詞のある動詞に限られる。
- 2) 「XがYを V-(s)ase」において、事態の成立にXが強い影響を持つものの、事態はXの完全なコントロール下にはなく、Yによる自律的な事態の達成（内的制御性）が含まれる。

これは、外崎（2018）が観察した結論とほぼ同じである。次の節では、これらの要因を分散形態論の枠組みで説明する。

4. 分散形態論における意味素性と統語構造

この節では、分散形態論において使役余剰を説明する可能性を探るために、田川（2016）と三宅（2017）の論考を参照する。

4.1 分散形態論における「使役（CAUS）」

まず、本稿のデータを分散形態論で分析するために、田川（2016）の「する」と「させる」の分析を応用する。田川（2016）では、「する」と「させる」が生起しうる環境においてどのようなことが起こるのかを、動名詞の他動詞の環境に見て論じている。田川（2006）は、Miyagawa（1998）より、/-(s)ase/ は、形態的に他動詞の分布の空きを埋める非該当（elsewhere form）として機能するとし、同じく動詞素性 [+V] に対応する非該当形の「する」と合わせ、次の論考を展開している。

まず、動名詞の自他について確認する。

(16) 自動詞タイプ

- a. [自] 車が爆発した。
- b. [他] 太郎が車を爆発させた

(17) 他動詞タイプ

- a. [他] 太郎が車を爆破した。
- (cf. [自] *車が爆破した)

(18) 自他両用タイプ

- a. [自] 問題が解決した。
- b. [他] 太郎が問題を解決した。

（田川2016, p. 2）

「爆発」などの自動詞タイプの動名詞を他動詞化するには、「させる」を用いる。また、「爆破」などの他動詞タイプの動名詞は「動名詞する」で他動詞として用いられる。「する」「させる」どちらも非該当形であるならば、どのように語形成がなされるのか。田川（2016）は分散形態論の枠組みで、次の構造を提案している。まず、「√（Root）」は統語範疇の決定されていない統語的要素であり、[+V] は他動性を担う機能範疇ではなく、範疇を決定する素性である。

- (19) a. 動名詞（自動詞タイプ）の統語構造と形態の対応

[CAUS [v [VN √ -√]] v [+V] CAUS] (田川2016, p. 5)
 爆発 s (s)ase

- b. 動名詞（他動詞タイプ）の統語構造と形態の対応

[v [VN [CAUS √ -√ CAUS]] v [+V]] (田川2016, p. 6)
 爆破 s

他動詞タイプの動名詞は、動名詞内に CAUS があるとする分析である。それを支持する議論として、他動詞タイプでは、「ノ句」に動作主の解釈が可能であるという事実、「する」の可能補充形の「でき（る）」が生起できるということを挙げている。

- (20) a. 自動詞タイプ：太郎 [*動作主／対象] の [爆発／死亡] (のし方がおかしかった)

- b. 他動詞タイプ：太郎 [動作主／対象] の [爆破／建設] (のし方がおかしかった)

(田川2016, p. 6)

- (21) 太郎は車を爆破できた。

(田川2016, p. 6)

「でき」が生起可能なことは、構造的に、動詞素性と可能の素性とが他の要素の介在がなく、近くにあるということを示しているという議論である。

田川（2016）は、(19ab) の構造の妥当性を、外来語動名詞のデータから論じ、同じように、外来語動名詞も、自動詞タイプでは「ノ句」の動作主の解釈が不可能であり、他動詞タイプではそれが可能であること、他動詞タイプの外来語動名詞では「する」の補充形の「でき」が出現可能であることを示し、語種の違い及び形態構造の複雑さは動名詞の自他と「する」「させる」の分布という点において影響しないということを示した。

- (22) a. 自動詞タイプ：太郎 [*動作主／対象] の [フリーズ／ブレイク]

- b. 他動詞タイプ：太郎 [動作主／対象] の [アピール／コピー] (田川2016, p. 11)

- (23) 太郎は自分の能力をアピールできる。

(田川2016, p. 11)

田川（2006）のポイントは、「(s)ase」は CAUS の非該当形であるということと同時に、他動詞タイプの動名詞は、動名詞そのものが CAUS という素性を持つという点である。

それでは、前節表1に挙げた使役余剰はどのように説明されるであろうか。自動詞タイプがないにも拘わらず「ラフな雰囲気キープ {する／させる}|」「魚をリリース {する／させる}|」のように「する」と「させる」が同じ項数で用いられる動名詞の構造はどのようなものであろうか。次節では、三宅(2017)が影山(1993)を再考する形で取り上げた「制御性(意図性)」「CONTROL」という意味素性について説明し、本稿で、CONTROL等、素性のバリエーションを提案することによる使役余剰の説明を試みる。

4.1 分散形態論における「制御性 (CONTROL)」

三宅(2017)は、影山(1993)が日本語動詞の意味構造に仮定した「制御性(意図性)」「CONTROL」という概念を再考し、その必要性を論じている。影山(1993)は、日本語に見られる非対格性の現象を「制御性 (CONTROL)」の有無に帰し、日本語の語彙概念構造(Lexical conceptual structure : LCS)」の意味述語に CONTROL を想定した。しかしながら影山(1996)では CONTROL は実質 CAUSE に置き換えられ、その後、CONTROL という意味述語は放棄されたままである。三宅(2017)は、日本語のデータより、影山(1993)のモデルは捨てるべきではなく、全ての動詞のタイプに、CONTROL を持つパターンと持たないパターンがあるとし、持たないパターンのものが「非対格動詞」とであると提案している。そのため、当然のこととして、「非対格他動詞」もあり得ると三宅(2017)は述べている (p. 126)。三宅(2017)は、「対象変化」(「使役」)について、次の構造を仮定している⁵⁾。

- (24) a. [CONTROL X [CAUSE X [BECOME [STATE Y BE_{PRED.}]]]]
 …… “壊す／割る／開ける／等” (多数)
- b. [CAUSE X [BECOME [STATE Y BE_{PRED.}]]]
 …… “悩ませる／悲しませる／苦しめる／等”
 (三宅2017, p. 130)

日本語は体系的に心理動詞の他動詞形が欠如しているため、生産的な使役形 (-s)ase を伴う形で代用する。形態的に使役形でも、統語的／意味的には他動詞相当であるとし、(24a)と(24b)の違いは CONTROL の有無にのみ帰せられる、と、三宅(2017)は分析している。

三宅(2017)は「6. おわりに」において、「使役文」等の事例研究が、CONTROL の存在の根拠たり得る可能性を記している。そこで、本稿の使役余剰の問題は、CONTROL などの概念を想定することによって説明できることを、次の4.3で示したい。

4.2 使役余剰の構造

影山(1996)が影山(1993)で用いた CONTROL という概念を放棄した理由の1つに、日本語のみに有効な独自の意味述語を立てることへの懸念が挙げられるだろう。しかし、ここでは CONTROL のように日本語の言語事象を説明するのに役立つ意味述語をあえて仮定する。これらの素性が何かに帰結できるかの考察は、今後の課題としたい。

本稿では、使役余剰の例として、和語「広げる—広げさせる」と、カタカナ動名詞「リリース {する／させる}」を例に考える。

では、「広げる—広げさせる」を考察しよう。「広がる（自動詞）—広げる（他動詞）—広げさせる（他動詞+(s)ase) —広がらせる（自動詞+(s)ase)」で、できるだけ自然な解釈になるような作例を（25）（26）に挙げた。さらに、構造を分かりやすくするために（27）にて文を簡略化した。

- (25) a. 政府の対応のまずさで、インフルエンザの感染が各地に広がった。
 b. 政府の対応のまずさがインフルエンザの感染を各地に広げた。
 c. 政府の対応のまずさがインフルエンザの感染を各地に広げさせた。
 d. 政府の対応のまずさがインフルエンザの感染を各地に広がらせた。
- (26) a. インフルエンザの感染が広がらないように、各自、手洗いをしっかりしましょう。
 b. インフルエンザの感染を広げないように、各自、手洗いをしっかりしましょう。
 c. インフルエンザの感染を広げさせないように、各自、手洗いをしっかりしましょう。
 c. インフルエンザの感染を広げさせないように、各自、手洗いをしっかりしましょう。
- (27) a. その病気が各地に広がった。 [自動詞]
 b. 対応のまずさが病気を各地に広げた。 [他動詞]
 c. 対応のまずさが病気を各地に広げさせた。 [他動詞サセル：使役余剰]
 d. 対応のまずさが病気を各地に広がらせた。 [自動詞サセル]

それぞれの述語の構造を以下のように仮定する。本稿では、新しい素性として、内的制御性（自律的な内的変化を引き起こす）を表す BECOME (+Int.) を仮定する。Int. は Internal Controllability (Internal Change を引き起こす) の略として用いた。状態変化を含む他対応のある自動詞は内的制御性があるゆえその構造に BECOME (+Int.) を内包する。対応する他動詞は、通常他動詞の他に、非対格他動詞を仮定する。通常他動詞は CONTROL の項である動作主 (Agent) を外項に持ち、BECOME を内包するが、非対格他動詞は、変化を引き起こす原因 (Causer) が外項であり、内的制御性を持つ BECOME (+Int.) を内包すると仮定する。

- (28) a. 自動詞の構造（「病気が広がる」）と形態の対応
 [BECOME X [v [√広] [+V]] BECOME (+Int.)]
 hiro g ar
- b. 他動詞の構造（「武将が領地を広げる」）と形態の対応
 [CONTROL X [CAUS X [BECOME Y [v [√広] [+V]] BECOME] CAUS] CONTROL]
 hiro g e
- c. 非対格他動詞の構造（「対応のまずさが病気を広げた」）と形態の対応⁶⁾
 [CAUS X [BECOME Y [v [√広] [+V]] BECOME (+Int.)] CAUS]
 hiro g e

項の増えない他動詞 + (s)ase 文 (使役余剰文) を考える前に, まずは, 通常の統語使役について述べる。統語的使役は, 「させ (CAUS)」の補部に当たる他動詞構造, あるいは, 自動詞構造が CONTROL を含む。以下, 自動詞構造を補部に持つ使役文を例に挙げる。太字部分が, 「花子が働く」という事象である。

(29) 自動詞文の使役「太郎が花子を働かせる」

[CONTROL X [CAUS X [CONTROL Y [EVENT 働く] CONTROL] CAUS] CONTROL]

それでは, 項の増えない使役余剰文について考える。(30)にその構造を挙げた。「広げさせ」の「させ」にあたる使役素性を便宜上, CAUS₂とする。CAUS₂の補部に入る他動詞構造は CONTROL を含まず動作主の項を持たない。CAUS を持つ非対格他動詞, すなわち, (28c) のような構造である。太字の部分が非対格他動詞構造部分である。そして, 他動詞部分の外項 (pro_{arb}) は, 特定できない言語化されない様々な原因の Causer で, この他動詞部分を意識すると「様々な要因が病気を広げる」といった解釈である。また, 述語の一番外側の「させ」(広げさせた) CAUS₂は, その補部に pro_{arb} を持つ CAUS₁を取り, 結果, 全体の意味としては, 「対応のまずさ (CAUS₂の項 X) が様々な要因 (CAUS₁の項 pro_{arb}) に病気を広げさせる」のように解釈される。「様々な要因」の部分 (pro_{arb}) は言語化されない。

(30) 他動詞 + (s)ase の構造 (「対応のまずさが病気を広げさせた」) と形態の対応

[CAUS X [CAUS **pro_{arb}** [BECOME Y [V [√広] [+ V]] BECOME (+ Int.)] CAUS₁] CAUS₂]]
hiro g e sase

次に, 自動詞 + (s)ase の文の構造を仮定する。太字の部分が自動詞構造部分である。

(31) 自動詞 + (s)ase の構造 (「対応のまずさが病気を広がらせた」) と形態の対応

[CAUS X [BECOME Y [V [√広] [+ V]] BECOME (+ Int.)] CAUS]
hiro g ar sase

使役余剰文が有対他動詞に限られる要因は, (30)の他動詞 + (s)ase の構造が, 有対自動詞の BECOME (+Int.) を含む構造を内包しているためと説明できる。

統語的使役文は, その補部に CONTROL を持つ他動詞構造, 自動詞構造を含むが, 使役余剰文の場合, その補語に BECOME (+Int.) を含む自動詞構造を持つ。繰り返すが, (+Int.) は, Internal Controllability (内的制御性) である。(s)ase という音形を持つ使役形態素の素性は, その補部に共通して, CONTROL 性を持つと言える。例えば他動詞を持たない心理動詞が「悲しむ／悲しませる」のように (s)ase によって他動詞化できるのも, 心理動詞がその意味に内的制御性を含むためと説明できる。

ただし, 使役述語が (s)ase の音形を持つ場合でも, 自動詞, あるいは他動詞に, ではなく, 自他の共通語根に (s)ase のついたものは, いわゆる他動詞の構造を持つ場合がある。例えば,

表1の「息を切らせる」は、以下の構造であろう。「息を切らす」のasと交替可能である。すなわち他動詞構造を作る補充形の非該当形(s)aseである。

(32) 「太郎が息を切らせて (走ってきた)」の構造⁷⁾と形態の対応

[_{CAUS}X [_{BECOME}Y [_V [√切] [+V]] BECOME] CAUS]
kir (s)ase

次に、他動詞タイプのカタカナ動名詞「リリース {する/させる}」を考える。どちらも、使役者は有意志者であり、主語はCONTROLの項と考える。動名詞の部分を実線で表した。田川(2017)が他動詞タイプの動名詞「爆破する」の分析において、動名詞にCAUSが内包していると考察したように、動名詞「リリース」自体がBECOMEとCAUSを内包すると仮定する。そして、「リリースさせる」は、特定されない任意の原因(*pro_{arb}*)が動名詞自体に含まれ、その原因が「魚をリリースする」と考える。また、その際のBECOMEは内的制御性(+Int.)のものであり、魚が自ら逃げていくような変化と解釈する。下線部が動名詞の構造である。

(33) 子どもが魚をリリース {する/させる}。

(34 a. 「VN する」他動詞の構造 (「子どもが魚をリリースする」)と形態の対応

[_{CONTROL}X [_V [_{VN}Y [_{CAUS-BECOME}√リリース BECOME-CAUS]] [+V]] CONTROL]
リリース s

(34 b. 「VN させる」の構造 (「子どもが魚をリリースさせる」)と形態の対応

[_{CONTROL}X [_{CAUS₂}X [_V [_{VN}Y [_{CAUS₁} pro_{arb}-BECOME
√リリース BECOME (+Int.) -CAUS₁]] [+V]] CAUS₂] CONTROL]
リリース s sase

音形的にはどちらも「子ども」「魚」の2項文であるが、構造的には(34b)の「リリースさせる」のほうに特定されない使役者(CAUS₁の項, Causerである*pro_{arb}*)が存在する。同じ動名詞でありながら、内部構造が違うことに違和感を感じるかもしれないが、動名詞そのものがその意味として、すなわち、素性として「内的制御性」を含みうるかであり、「なる」言語である日本語としては、そういったオプションを比較的持ちやすいのではないかと考えられる。

この分析で、外崎(2018)で取り上げた「形容詞ク {する/させる}」の構造を仮定すると、以下ようになる。同じく原因主語であっても、「小さくする」の場合のCauserは主語のみであり、特定されない任意の原因(*pro_{arb}*)を内包しない。

(35 a. 「形容詞クする」の構造 (「新しい治療方法がガン細胞を小さくする」)と形態の対応

[_{CAUS₁}X [_{BECOME}Y [_A [√小] A] [+V] BECOME (+Int.) CAUS₁]
tiisa ku s

- b. 「形容詞クさせる」の構造(「新しい治療方法がガン細胞を小さくさせる」)と形態の対応

[CAUS₂ X [CAUS₁ pro_{arb} [BECOME Y [A
 [√小] A] [+V] BECOME (+Int.)] CAUS₁] CAUS₂
 tiisa k s sase

前節で「余剰使役不可」とした位置変化の使役余剰について構造を考察する。以下に再掲する。

- (8) a. 全部の荷物が台上に載った。 [自動詞]
 b. 太郎が全部の荷物をうまく台上に載せた。 [他動詞]
 c. *太郎が全部の荷物をうまく台上に載せさせた。 [他動詞サセル：使役余剰]
 d. *太郎が全部の荷物をうまく台上に載らせた。 [自動詞サセル]

まず、自動詞構文、他動詞構文は以下である。「載る」は内的制御性のない(自律的な変化の起こらない)自動詞である。ゆえに、BECOME (+Int.)ではない。また、他動詞構文の場合も、意図性のないCauserが主語となりうる他動詞(36c)がない。いつでも他動詞の主語は、有意志名詞(CONTROLの項)である。

- (36) a. 自動詞の構造(「荷物が台上に載った」)と形態の対応

[BECOME X [STATE X [V [√載] [+V]] STATE at Z] BECOME]
 no r

- b. 他動詞の構造(「太郎が荷物を台上に載せた」)と形態の対応

[CONTROL X [CAUS X [BECOME Y [STATE Y
 [V [√載] [+V]] STATE at Z] BECOME] CAUS] CONTROL]
 no se

- c. 他動詞の構造(「*強風が荷物を台上に載せた」(Causerが主語))と形態の対応

*[CAUS X [BECOME Y [STATE Y [V [√載] [+V]] STATE at Z] BECOME] CAUS]
 no se

他動詞+saseの構造ではCAUS₂の補部に(36b)の他動詞構造が入ることになる。(37)ではWが「太郎」に相当するが、補文のXの項(「載せる」の動作主)は特定されず、非文となる。

- (37) 他動詞+saseの構造(「*太郎が荷物を台上に載せさせた」)

*[CONTROL W [CAUS₂ W [CONTROL X [CAUS X [BECOME Y [STATE Y [V [√載] [+V]] STATE at Z]
 BECOME] CAUS] CONTROL] CAUS₂] CONTROL]

次に自動詞+saseの構造について考える。モノ主語の「載る」はBECOME (+Int.)のオプションのない動詞である。ゆえに、自動詞構造にCAUSを付けて外項を導入しようとする時、

他動詞構造と同じになってしまう。結果、CAUS+CONTROLの部分は /se/ の音が入り、他動詞の「載せる」が生起し、自動詞+(s)aseの「載らせる」が阻止される。

- (38) 自動詞+saseの構造「*太郎が荷物を台上に載らせた」= (36b)の他動詞と同じ構造
- $$\begin{array}{c}
 [\text{CONTROL X} [\text{CAUS X} [\text{BECOME Y} [\text{STATE Y} \\
 \quad [\text{V} [\sqrt{\text{載}}] [+V]] \text{ STATE at Z} \text{ BECOME}] \text{ CAUS}] \text{ CONTROL}] \\
 \text{no} \quad \text{r} \qquad \qquad \qquad \text{—sase—}
 \end{array}$$

では定延(2000)が「カビ生えモデル」で説明した「ださせる」はどうだろうか。(12)を再掲する。

- (12) もうすぐ試合だが、太郎の怪我の具合があまり良くない。
- 太郎が^で試合に出るのは、無理そうだ。 [自動詞]
 - 太郎を^だ試合に出すのは、無理そうだ。 [他動詞]
 - 太郎を試合にださせるのは、無理そうだ。 [他動詞サセル：使役余剰文]
 - 太郎を試合にでさせるのは、無理そうだ。 [自動詞サセル]

自動詞文では、自分の意志で試合に出るのであるから BECOME (+Int.) を持つ構造となる。

- (39) a. 自動詞の構造 (「太郎が試合に出る」)
- $$\begin{array}{c}
 [\text{CONTROL X} [\text{BECOME X} [\text{STATE X} [\text{V} [\sqrt{\text{出}}] [+V]] \text{ STATE at Y} \text{ BECOME (+Int.)}] \\
 \text{CONTROL}]
 \end{array}$$

他動詞構造は、「出」という状況を直接的に作り出すのが CONTROLの項の「監督」のため、BECOMEは内的制御性を持たない。

- b. 他動詞の構造 (「(監督が) 太郎を試合に出す」)
- $$\begin{array}{c}
 [\text{CONTROL X} [\text{CAUS X} [\text{BECOME Y} [\text{STATE Y} [\text{V} [\sqrt{\text{出}}] [+V]] \text{ STATE at Z} \\
 \text{BECOME}] \text{ CAUSE}] \text{ CONTROL}]
 \end{array}$$

項の増えない他動詞+saseの構造には、CAUS₂の補部としての Causer (CAUS₁) に pro_{arb} が用いられる。すなわち、音形のない Causerが存在すると考える。

- c. 他動詞+saseの構造 (「(監督が) 太郎を試合にださせる」)
- $$\begin{array}{c}
 [\text{CONTROL X} [\text{CAUS}_2 \text{ X} [\text{CAUS}_1 \text{ pro}_{arb} [\text{BECOME Y} [\text{STATE Y} [\text{V} [\sqrt{\text{出}}] [+V]] \text{ STATE at Z} \\
 \text{BECOME (+Int.)}] \text{ CAUSE}_1] \text{ CAUSE}_2] \text{ CONTROL}]
 \end{array}$$

自動詞+saseは、CAUS₂が補部に CONTROLを取り、BECOME (+Int.)を内包する。

d. 自動詞 + sase の構造 (「(監督が) 太郎を試合にでさせる」)

[CONTROL X [CAUS₂ X [CONTROL Y [BECOME Y [STATE Y [V [√出] [+V]] STATE at Z]
BECOME (+Int.)] CONTROL] CAUSE₂] CONTROL]

このように分析することで、使役余剰は余剰ではなく、内的制御性を持つ BECOME (+Int.) を内包する CAUS の項として pro_{arb} という音形のない使役者を項に取っていると考えられる。

5. まとめ

本稿では、田川 (2016) が CAUS を動名詞に内包させたように、CAUS を様々なレベルで用いた。また、三宅 (2017) が CONTROL という意味述語を制御性 (意図性) を表すものとして影山 (1993) より復活させたことと合わせ、それをヒントに、BECOME (+Int.) という内的制御性 (Internal Controllability: 自律的な内的変化 Internal Change を引き起こす) を表す素性を仮定した。それにより、項の増えない他動詞 +sase の CAUS は、その補部に、実は、音形のない Causer (pro_{arb}) を持ち、項が増えていないのではなく、音形をもたないだけであること、さらにその CAUS₂ は BECOME (+Int.) を内包することを論じた。

このように分析することで、項の増えない他動詞使役文 (使役余剰) は、統語的使役とある程度平行的に説明できる。どちらも、その補部に制御性 (CONTROL あるいは、Internal Controllability) を内包するのである。

日本語は膠着言語であり、述語には豊かな造語力がある。自動詞、他動詞、自動詞の使役、他動詞の使役、/sase/ 使役、/as/ 使役、そういった形態素はそれぞれの意味的統語的な素性に合わせ、語彙挿入されたものであろう。こうした日本語の特徴を示すには、分散形態論の枠組みは、有用である。

今後は、CONTROL や BECOME (+Int.) によって他言語の現象を説明しうるか考察し、これらの素性の存在の妥当性を検証する⁸⁾。あるいは、これらの要素が何に帰結しうるか、考えたい。

参考文献

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房。

影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版。

黒田成幸 (1990) 「使役の助動詞の自立性について」『文法と意味の間 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』 pp. 93-104, くろしお出版。

Kuroda, S-Y. (1993) Lexical and productive causatives in Japanese: an examination of the theory of paradigmatic structure. *Journal of Japanese Linguistics* 15. pp. 1-82.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the pieces of inflection," *The View from Building 20*. Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.). pp. 111-176, The MIT Press.

早津恵美子 (1995) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」須賀一好・早津恵美子 (編) 『動詞

- の自他』 pp. 179-197, ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Vol.II: Descriptive Application*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Miyagawa, Shigeru (1998) (S)ASE as an elsewhere causative and the syntactic nature of words, *Journal of Japanese Linguistics*, 16. pp. 67-110.
- 三宅知宏 (2017) 「日本語動詞における『制御性 (意図性)』をめぐって」 森山卓郎・三宅知宏 (編) 『語彙論的統語論の新展開』 pp. 117-134, くろしお出版.
- 森篤嗣 (2004) 「形容詞連用形に後接するスルーサセルの置換について」 『日本語教育』 120号, pp. 33-42.
- 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』 創拓社.
- Nishiyama, Kunio (1999) "Adjectives and the copulas in Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 8. pp. 183-222.
- 定延利之 (1991) 「SASE と間接性」 『日本語のヴォイスと他動詞』 仁田義雄 (編), pp. 123-147, くろしお出版.
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』 大修館書店.
- 田川拓海 (2016) 「動名詞の構造と「する」「させる」の分布」 庵功雄・佐藤琢磨・中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』 pp. 1-20, くろしお出版.
- 田川拓海 (2017) 「動作動詞句を形成する『形容詞ク形+する』」 『文藝言語研究』 71巻, pp. 169-181, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.
- 外崎淑子 (2018) 「『する/させる』の交替について」 神田外語大学大学院紀要『言語科学研究』 24. pp. 43-61, 神田外語大学大学院.

注

- 1) 「自律的な事態の達成」は、実際には「しやすい」「しにくい」といった段階的なものであるが、素性は「有無」として捉えるため、「+(有)」「-(無)」としている。
- 2) 田川 (2017) は「形容詞ク形する」の構造として、「形容詞ク」の部分に Nishiyama (1999) を引いて PredP と分析しているが (Pred は Predicate であり、叙述を担う機能範疇である)、本稿では外崎 (2018) を引き、そのまま Pred なしの構造とした。
- 3) 「茶柱が立つ」などは非情物主語でも問題なく、内的制御性のある自動詞文と言えるが、対応する他動詞はない。
- 4) / (s)as/ 形が口語でよく用いられる表現のため、尊敬語化と相性が悪いということもあるが、「これ、田中先生がお書きになったんだってさ」のように、「お～なる」尊敬表現自体が口語と相性が悪いというわけではない。ただし、「お飲みしになる」も連用形ゆえ、連用形の許容度の低さを表しているのであり、尊敬語化の有無とは無関係とも言える。また、Kuroda (1993) の判断とは異なり、(13b) のような文を許容する母語話者も多く、許容度には個人差がある。
- 5) 三宅 (2017) は、分散形態論を採用するとは明記していないが、意味構造と統語構造の一体化を目指しているため、これらを「語彙概念構造 (LCS)」とは呼んでいない。
- 6) 原因 (Causer) が主語の他動詞文において、その BECOME を BECOME (+Int.) と仮定したが、主語が原因であれば必ず内的制御性が働くとは言えないかもしれない。文脈によっては動作主 (Agent) 主語と同様、外からの力で変化させられる BECOME のほうが適切な場合も考えられる。潜在的に BECOME (+Int.) であっても、その内的制御性がアクティベートされるか否かは文脈によると考えたほうがいいのかもかもしれないが、このあたりの考察は今後の課題としたい。
- 7) 「切れる」に対応する他動詞には、動作主を必要とする「切る (太郎が糸を切る)」と、本稿で

扱っている「切らす（息を切らす，小銭を切らす etc）」がある。本稿では，「太郎が息を切らす」を，動作主なし，CONTROLなしの構造として仮定したが，「太郎」を Causerのみとは考えにくい。影響の受け手としての素性も考えなければならないが，今回，この議論には立ち入らない。

- 8) 査読者より，中国語では，「叶子红了（葉っぱが赤くなった）」「?? 信号灯红了（信号が赤になった）」「信号灯变赤了（信号が赤になった）」のような違いがあり，中国語において，内的制御性が関わるようなものは「形容詞+了」で表すことが可能というコメントを受けた。内的制御性は，他言語の統語構造においても説明可能な素性として立てられそうである。また，統語構造において範疇を精密化していくカートグラフィーの流れからしても，述語の素性を形態素（音）と細かく結びつけていく手法に可能性はあるように思う。